

## 教育実習指導における附属幼稚園との連携

林 美 代・廣 瀬 三枝子

### 1. 研究の所在と目的

本学子ども学科第Ⅰ部および第Ⅲ部では、専門的知識と技術をもち、多様なニーズに柔軟に対応できる保育者の養成を目指している。保育者を目指す学生にとって、実習は貴重な体験の場であり、現場から得られるものは大きい。その実習に向けての指導は、実習の意義と目的、実習関係書類の作成、実習にあたる姿勢やマナー、守秘義務についての指導、電話のかけ方や学外オリエンテーションの指導、実習日誌や指導案の書き方の指導、実習を欠席した際の対応と連絡について、手遊びや絵本・紙芝居の読み聞かせなどの保育技術指導、礼状の書き方や実習後の実習日誌の処理についての指導など、事務手続きに関することから保育技術に関することまで多岐にわたる。そのため、既定の時間内で十分な指導することは難しく、内容を精査する必要がある。それにもかかわらず、社会的には保育者の専門性や資質能力の向上に対する要請が高まっており、実習前に効率よく指導を行う必要がある<sup>1)</sup>といわれている。

本学の学生にとって「教育実習Ⅱ」(幼稚園本実習)は、「保育実習Ⅰ」を行った後に経験する実習であるが、緊張や不安を抱える学生も少なくない。三澤は、学生が実習に対してどのような不安を抱えているかという研究を行い、学生の中には現場に適應できるか、保育の実践がうまくできるか、専門知識や保育理解が身についているかなどに関する不安

や、保護者や子どもたちとコミュニケーションが取れるかといったことへの不安があり、これらは保育現場から積極的に学ぼうとする意欲以前に、自分に自信がなく注意や指導を受けて評価されることを恐れているのだろうと指摘する<sup>2)</sup>。また栗原は、教育実習の前後に質問紙調査を行い、学生は自分がどのように見られているのかという不安を抱いていたり、保育技術について出来るか否かの二極化で捉えようとする傾向があったりすると述べている<sup>3)</sup>。そして実習事前指導の要点として、①自分に向けられた方向性を、子どもに向けたものに変えること、②保育技術は保育の目的に向かって練り直し、保育技術の表層的な習得ではなく、保育の重層性を理解すること、③実習行為は計画→実践→省察→改善のサイクルで継続性をもって行われることを理解すること、の3点を挙げ、そのためには観察実習を行うことに意義があるとする<sup>4)</sup>。観察実習に関しては、1週間の観察実習でのエピソード記録を使った久保田の報告<sup>5)</sup>や、体験実習を通して何を学んだかについて調査した野上の研究<sup>6)</sup>などもある。そして三澤は、1日の体験実習であっても、学生自身や保育者、環境に関する学びを得ることが推測でき、学生の保育現場での学習を交えた授業展開を行うことでより深い学びが出来るのではないかと述べており<sup>7)</sup>、実習前に教育・保育現場の実態を知るための学びには意味があると考えられる。

また教育実習先からの指摘として、「どうしても段取りを先に考えてしまっている」「学生中心に保育を行おうとしているため、子どもの実態とそぐわない」といった子ども理解に関するものも多い。現在は「主体的・対話的で深い学び」が求められており、遊びを通してそれを支える教員の養成が求めら

令和2年1月6日受理

連絡先 〒769-0201 香川県綾歌郡宇多津町浜一番丁10番地

香川短期大学 子ども学科

TEL 0877(49)8049 FAX 0877(49)5252

Email hayashi@kjc.ac.jp

れている。そのためには、子ども理解が重要となる。本学では、指導案の指導や模擬保育は様々な授業で展開されており、指導の仕方については一定の知識があると考えられるが、日誌の指導は実習指導として行うことが主であり、幼稚園の子どもを対象に観察したり実践を行ったりする経験は少ない。

そこで筆者の担当する事前事後指導としての「教育実習Ⅰ」において、まずは子ども理解が出来るように幼稚園での観察を重視した授業を組み立てた。本研究では、本学附属幼稚園において実施した観察等の現場体験とそれに関連する学内授業について報告するとともに、学生の記録などから実践内容を検討し今後の指導に役立てるための方法を検討することを目的とする。

## 2. 研究の方法

### (1) 研究の対象

「教育実習Ⅰ」を履修する本学子ども学科第Ⅰ部2年生(2クラス)及び子ども学科第Ⅲ部3年生(1クラス)

### (2) 研究の方法

「教育実習Ⅰ」の授業内で本学附属幼稚園において行った観察や部分保育などの実践と、それに関連する学内授業について、学生の記述を中心に検討し、活動の影響(効果や問題点)を考察する。

### (3) 実践の内容

- ①幼稚園における子どもの実態を知る
- ②部分保育を体験する
- ③幼稚園の機能を理解する
- ④設定保育を体験する
- ⑤行事を体験する

## 3. 本学附属幼稚園における授業の展開

### (1) 子どもの実態を知る

4月25日(第Ⅲ部3年生, 以下Ⅲ3), 26日(第Ⅰ部2年生Aクラス, 以下2A), 5月10日(第Ⅰ部2年生Bクラス, 以下2B)の3日に分かれ、7つのグループ(3歳児3クラス, 4, 5歳児2クラ

スずつ)に分かれて2コマ続き(180分)の幼稚園見学を行った。ここでは、子どもの実態や教師の支援の仕方を知るとともに、実践的に実習日誌の書き方を学ぶことを目標とした。また、観察にあたり子どもの視線に合わせて腰を低くすること、メモは子どもたちが気にならないようにさりげなく行うこと、子どもが多く遊んでいる方に背中を向けて座らないこと、保育に支障が出ないように活動に合わせて観察する位置を確認することなどをその場で指導した。

観察後は観察記録(教育実習日誌の記録用紙)を記入し、記録を添削し指導を行った。指導内容としては、三澤が指摘するように誤字、定規を使わない図、過去形・進行形での記載のなどの「基本的な記述方法」、記入欄の間違いや主語の間違い、援助や配慮の意図等の記載漏れ、手遊び・絵本のタイトルのみ記入などの「記録の不備や不十分」、否定的な記載、強制的な表現、援助の捉え間違いなどの「専門的な保育用語」の3つ<sup>8)</sup>が中心となった。

また、見学から学んだこと(感想・反省・疑問点など)では、以下のような記録が見られた。

学生A: ブランコを押す順番で「先生こっち押して」「こっちも押して」と4人同時に言われてそうしようかと迷った。「左の子から順番に20回ずつね」と決めてみたら「いいよ」と言われたので、それぞれの子に公平に接することの大切さを学ぶことが出来た。

学生B: 子どもの日の集いで、園庭に集合する時にほとんどの子は集合できていたが、1・2人「外に行かない!」「集いなんか嫌い!」と言っている子がいて、どう対応するべきか困っていました。このような場合はそっとしておくべきか、せめて外で見学しようというべきか、集合させるべきか、どうすればいいですか?

学生C: 集団で行動する際、自由に動いてしまう子どもへの対応が難しく、どのようにすればよいのか教えてください。

学生D: 教室に入ったら、初対面で言葉はしゃべらないけれど〇〇するとか言うが無言でしていたので、もっといいかわかり方があると思った。滑り台で順番を守れない子もいたり、言っ

たら守れる子もいたので、守れない子はどうして守れないのか不思議だった。

学生E：ペアで円になって踊る時に、子どもの間に入って踊っていました。かしわもちを食べる時には、においなどどうだったと声かけをしていました。1年に1回しかないで、大事なことだと思いました。おにごっこで遊ぶ時には、ルールや鬼を決める時など子どもたちが主となっていました。

(一部省略/下線は筆者)

この時期、学生の多くは保育に正しい答えがあり、それを子どもに教えなければならないと思っている。そのため、自分の予想通りに動かない子ども、学生が望ましいと思っている姿から外れている子どもに対して、どうすれば子どもたちが自分たちの思い描くように動くかを気にしている。また、学生Aのように学生側には、何かあれば教師がすぐに「決める」という発想があり、トラブルはすぐに解決しなければならない、子どもが困っていれば何かをしなければならない、正しいものを教えなければならないという思いが見える。さらに学生Aの記録の中に「公平に接する」という記述がある。学生は「公平」と思っているようだが、子どもからすると本当に「公平だ」と受け止められているのかは分からない。「いいよ」と心から納得したのか、あきらめから出た言葉なのか不明である。子どもの思いと大人の思いのズレは生じやすいので、子どもの思いをもう少し丁寧に聞く必要があることを学んでいかなければならないだろう。

記録の苦手な学生では、学生Eのように見たことをそのまま「～していた」と事実を羅列する傾向が見られた。そして感想を書かなければという思いからか、それについて「～と思った」と感じたことを足している。子どもや教師の様子を見ることで精いっぱいだったのかもしれない。

幼稚園の子どもたちと触れ合った経験の少ない学生にとって、実習前の見学は、子どもの様子を知ることが出来る機会となった。講義等で聞いていた子どもの発達の姿を見ることで、年齢差や個人差を感じることが出来たのではないかな。また子どもたちの様子を見て関わった内容を記録させたことで、「大

人が中心となって子どものために何かをさせるのが教育」という考え方をしていた学生が予想以上に多いことも浮き彫りとなった。学生が思い描くように子どもたちは動かず、もどかしさを感じる学生も多かったが、この経験から子どもの思いに寄り添って保育をすることが重要であるということを少しずつ学んでいけるのではないかな。

## (2) 部分保育を体験する

6月上旬より始まる教育実習を前に、5月17日(2A)、23日(Ⅲ3)、24日(2B)の3日に分かれ、①で見学したクラスにおいて手遊びや絵本の読み聞かせなど、各自が子どもの前に立って部分保育を体験した(図1、図2、図3、図4、図5、図6)。ここでは、子どもへの対応の仕方について理解する



図1 手遊び(年長)



図2 絵本の読み聞かせ(年少)





図3 ピアノの弾き歌い（年中）



図6 ペーパーサートでクイズ（年少）



図4 パネルシアター（年少）



図5 エプロンシアター（年少）

とともに、実際に子どもの前に立つことで見えてくる自分の特徴について知ることを目標とした。

事前準備としては、学生がしたいことをグループごとに連絡票に記入し、担任に確認してもらった。部分保育の準備を行う際、学生は「失敗」という言葉をよく口にしていて、思ったように子どもが動いてくれなかったらどうするか、場が白けてしまったら（あるいは子どもたちが活発すぎたら）どうやって収めるのかなどを気にしており、恙なく終わることをよしと考えていたようだ。そのため、子どもの前で話す内容を一生懸命シミュレーションし、「完璧な教材を提供」出来るように練習を重ねる姿が合った。そのため、子どもの思いを理解し、子どもの姿に合わせて臨機応変に対応するように指導した。また、「失敗」という言葉を多用する学生については、保育実践から反省し、次につながるよう改善策を探すこと重要であることを何度も伝えた。

部分保育を体験した後の技術的な指導についてはクラス担任もしくは補助教員より行ってもらい、特に気になる内容や援助の仕方・言葉かけについてのみクラス担任より授業担当者に伝えられた。伝えられた内容としては、紙芝居の抜き方が違う（左に抜く学生が多い）ことと、準備物の連絡不足（準備物としてパネルシアター用のパネルを園にお願いしていなかった）があったことである。これらについては後日、実習直前の学内での授業で再度指導した。

体験後の反省や感想としては、以下のような記述が見られた。

学生A：絵本（5歳児クラスで『のらねこぐんだん パン工場』）の対象年齢が少し低かったと思った。子どもたちを煽るのが難しいし、思ったよりノッてきてくれなかった時に、その後どう繋げていくか即興で喋るのが慣れないと難しいなと思った。

学生B：給食前だったのでパンシリーズで部分指導（大型絵本）をしたのですが、集中できていない子や違うことをはじめる子や、誰かが他事をやりだすと、それをまねしたりなど全員が集中できていませんでした。

学生F：（手遊びの導入で、）緊張で言うべきことが練習通り言えなかったりしたので、何度も練習して自信をもって言えるようにします。

学生G：実際に子どもの前ですること、リアルな反応が見れたりして緊張したけど良かった。

学生E：子どもの前に立って話したりするのは難しかった。

（一部省略/下線は筆者）

実習直前であるが、学生の意識は教師主導である。学生Aの「子どもたちを煽る」という表現が物語るように、教師は子どもたちを「やる気にさせないといけない」「いろいろな手段を使って教師のほうに子どもたちを向かせなければならない」といった意識が見える。学生Bは教師の思い通りに動かない子どもたちが気になったようで、全員が同じように動いていないことがもどかしかったようである。全員が同じ方（教師側）を向き、絵本の読み聞かせが出来るようなクラス作りをすることが必要だと感じているようで、このような感想を持った学生が多かった。学生は「教師の思いに子どもを応えさせる」ことが教師の役割と感じているのではないかと思われる。

また、学生Fのように、子どもの前で話す言葉の練習を重ねたのにも関わらず、そのようにできなかったことを悔やむ学生もいた。自分が用意した台詞通りに話さなければならないとの思いが強いようで、子どもの思いを大切にするより指導案通りに進めることに注意が払われていることも見えてきた。子どもの思いに寄り添いながら、臨機応変に対応できるように指導していく必要がある。

学生Gや学生Eは率直な感想であろう。学生は模擬保育を多く体験しているが子どもたちの前で保育をする経験はほとんどなく、自分たちの想像した子どもの姿とのズレに驚いていた。自分たちの想像以上のことが目の前で起こったと感じた学生も多く、実習直前に子どもの姿を知る機会となった。

### （3）幼稚園の機能を理解する

幼稚園が長期休暇に入る7月26日（2A, 2B）と12月25日（Ⅲ3）の2日に分かれ、預かり保育（異年齢保育）を体験した。ほとんどの幼稚園で預かり保育は実施されているが実習園の中には預かり保育を実施していないところもあるため、全員が教育課程に基づく活動と教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動の違いを理解できるように努めた。学生はグループで遊びを用意し（図7、図8）、



図7 子どもたちのサッカー（4・5歳児）



図8 3択クイズ（4・5歳児）

子どもたちの興味・関心が自分たちの予想と合っているか理解できるようにした。

以下は学生の感想である。

学生A：満3歳児・3歳児の前で喋ることは難しいけれど、子どもたちが一緒に手遊びをしてくれたり、興味をもって聞いてくれたり歌ってくれたりすると嬉しく感じる。子どもたちが一緒に楽しめるような声かけをしっかりとできるようになりたいと思った。

学生H：教師は、トラブルが起きた時には間に入ってお互いの意見を聞いたり、保育な邪魔にならないように隣の部屋で子どもの気持ちが落ち着くまで待ったりして、対応の仕方が勉強になった。

学生I：クラス担当ではないので、先生方も色々なクラスの先生が、協力して保育していることが分かりました。

学生J：預かり保育ということで、いつもとは違った様子の子どもの様子や、保育の流れを見ることができ、いい経験になりました。幼稚園でも預かりの時は午睡があることを初めて知りました。

学生E：(4・5歳児で)子どもをおこるのではなく、相手の気持ちを伝えたり、どうしたらよかったのかを一緒に考えたりするのが大切だと思った。

(一部省略/下線は筆者)

感想から、教師主導から子どもの思いを考えて保育するように視点が変わってきている学生も見られるようになってきた。前期実習を終え、「保育をするためには子どもの姿からねらいや活動を考えることが重要であると気づいた」と述べる学生も増え、子ども理解の重要性に実習を通して気づいてきていることもあり、学生の子どもの見方が変わってきたように感じた。感想として学生Hのように子どもに寄り添う教師の姿を挙げる学生も多く、本学附属幼稚園での現場体験を通して子どもを理解する態度を学ぼうとする姿勢も見られるようになってきた。

また、感想として文章には出てこなかったが、子どもの自由な発想への驚きもあった。学生と一緒に製作した置物に紐をつけ、動物のように散歩させる



図9 置物の散歩(4歳児)



図10 ボウリングのピンを積む様子(3歳児)

姿(図9)に学生は衝撃を受けたようで、そのことを筆者に伝えてきた。4歳児特有の感性であるが、学生は体験を通して学ぶことができたようだ。満3歳児ではボウリングのピンとして用意したペットボトルを積む姿(図10)が見られ、学生が教師に聞きながら対応する姿もあった。

教育実習先では、預かり保育を経験した学生も多かったが、預かり保育自体が行われておらず全く知らなかった学生にとっては新鮮なものだったようである。授業の中で幼稚園では預かり保育の実施が増えていることは習っているが、体験がなければイメージが出来ない学生もあり、この体験を通して理解が深められたようである。その点でも意味があったと思われる。



#### (4) 設定保育を体験する

11月上旬に始まる後期教育実習に向けて、10月4日(2A)、16日(Ⅲ3)、25日(2B)の3日に分かれ、グループで簡単な設定保育の指導計画を立て、子どもの前で実践した(図11、図12)。後期教育実習では、何らかの形で設定保育を行うため、そのための指導の一環で行った。

部分保育の指導案作成にあたっては、子どもの姿を理解できるように直前の子どもたちの生活の様子撮影を幼稚園に依頼し、学内での授業において活用した。ビデオを見て学生が記録した「子どもの遊びから気づいたこと・考えたこと」のメモには、「既存の遊びにアレンジを加えて遊ぶ」「コオロギなどを飼っている」「捕まえた虫を図鑑で調べる」などの事実の羅列が多く見られた。しかし、授業の中でビデオの解説を加え見方を指導していく中で、「同じくらいの友達が出来ることは自分もできている」と思っている。しかし出来なかった時の悔しさなど、子どもの気持ちに寄り添う「大人だったらこうするのに、ということは置いておいて子どもたちの挑戦を見守る」などの表現が出てくるようになった。このことから、当初学生は「子どもから見えた事実＝気づき」だと思っていたのではないだろうか。その状態で指導案の「子どもの姿」を書いていけば事実の羅列になってしまう。しかし、内面を深く掘り下げたものを現場では気づきとしてとらえているので、子どもの思いや楽しんでいるところを考えられるように指導していく必要がある。授業者として、そのような指導の重要性について気づくことができた。

当日は30分程度の実践を行うことで、保育実践は「計画→実践→省察→改善」のサイクルで行われており、子ども理解が基盤となっていることを理解できるように努めた。部分保育を体験した後の技術的な指導についてはクラス担任もしくは補助教員より行ってもらい、特に気になる内容や援助の仕方・言葉かけについてのみクラス担任より授業担当者に伝えられた。伝えられた内容としては、勝敗のあるゲームについての配慮について(上手くできなかった子どもが注目されてしまうようなしりとりになってしまっていたこと)、教材研究不足(教材として使う画用紙の大きさ、教材と子どもの人数の不一致、糊で貼れるものと貼れないものの区別など)であっ



図11 木の製作(年少)



図12 しりとり爆弾ゲーム(年長)

た。これらについては後日、実習直前の学内での授業で再度指導した。

体験後の反省や感想としては、以下のような記述が見られた。

学生A:(教師の支援として)子どもたちの自由な色選びや、塗り絵を楽しむ気持ちを受け止めることが大切である。紅葉は赤やオレンジ、どんぐりは茶色などにとらわれてはいけない。どんぐりが赤と青になったり、イチオウが赤になったりと、子どもたちの色彩使いを見ていて楽しかった。

学生C:自由な子、落ち着いている子と様々ですが、どこの園でも共通なことなので実習では子どもの関心のあることに一番近いことができた

ばと思います。

学生K：楽しんでる子どもも多かったが、予想をほとんどしていなかった泣く子どもがいたのでとても驚いた。「恥」についての配慮が足りなかった。(しりとり爆弾ゲームで) 答えられなかった際は爆弾が爆発するという言い方だったが、間違えたという意識が強くなる言い方だったかもしれないと思った。他の言い方に変えてさっと流して次にいった方が良かったかなと思う。

学生L：(3歳児でも) 勝手にじゃんけんができる と思い込んでいたので、難しいだろうなという想像が出来ていませんでした。頑張って子どもたちの特性や好きなものを理解しておきたいと感じました。

学生M：全く予想していなかったことが次々に起こったので焦ったけれど、最後までやり切れてよかったと思いました。

学生E：終わるタイミングが難しかった。どう言葉かけをするか難しかった。

(一部省略/下線は筆者)

学生にとって最後の実習となる後期教育実習を控え、学生Aのように子どもたちの自由な色選び・発想・活動を楽しむ気持ちを受け止めようとしている学生が増えてきた。また学生Cは子どもの様子は様々なであることを理解し、子どもの気持ちに寄り添った保育を心がけようとする意識が生まれている。前期教育実習前では、「教師の思いに子どもを応えさせる」ことが教師の役割と感じている学生が多かったが、実習や現場での体験を通して子どもの思いを大切にする保育へと意識が移っていることが分かる。

また、学生Kや学生Lのように思いもよらぬ子どもの反応から保育を振り返り、次に繋げようとする姿勢も多く見られた。子どもの発達特性を十分に理解できていなかったという点もあるだろうが、設定保育の体験を通してその点に気づき反省している。学生は「失敗した」ということを非常に気にするが、そこから次に繋げられるようになってきており、保育実践は「計画→実践→省察→改善」のサイクルで行われていることが分かってきたようだ。学生Mの

ように予期せぬ子どもの反応に対応しながら最後までやり切ったことを自分なりに評価し、臨機応変に対応することの意味を考える学生も出てくるようになった。学生の変化も感じられるようになった。

#### (5) 行事を体験する

幼稚園は、様々な行事が行われる。子どもにとっての行事は、生活の流れに変化や潤いを与えるだけでなく、子どもの活動意欲を高めたり子ども同士のつながりを深めたり、子ども自身の生活を広げる場ともなる。毎日積み重ねてきた保育を、どのように保護者に感じてもらうか、行事において教師はどのような役割を担うのか、この中で子どもたちはどのような成長をしているのかなど、学生にとって考えるべきポイントは多いと考えた。また、保護者にとっては子どもの成長を見る機会であり、教師にとっては子どもとの関係だけではなく、保護者との関係も重要になってくる。そのため、保護者に子どもの様子を伝えるということはどういうことなのかを見て感じることもできるのではないかな。

そこで、10月12日に本学附属幼稚園で行われた作品展を見学し、行事における教師の役割や子どもの発達と表現について理解することを目標とした。また、保護者と教師の様子を見ることにより、保護者対応についても感じられるようにすることを目指した。

以下は学生の感想である。

学生A：4歳のひまわりは、色合いも大きさも自由で、子どもたちの想像力はすごいなと思った。5歳にもなると、同じテーマでも染め紙やプチプチ、折り紙など使う材料から様々な種類があって、本当に自分のやりたいようにやって遊んでいるんだと感じた。様々な材料から虫や魚や自動車が生まれていて、年齢が上がるにつれてディテールのつくりも細かくリアルになっていく様子を見るのが楽しかった。

学生K：3歳児の絵は、基本の丸に紙を貼るのは同じでも、形や色も様々になっていて個性があった。4歳児のひまわりは大きさも違い、筆だけでなく手も使っているようだった。5歳児になると同じアジサイというテーマでも折り紙



や花紙など、使う素材が違っていることに気がついた。

学生L：教師は保護者や子どもたちへの言葉かけを絶対に怠らず、丁寧に対応していた。「子どもたちの思いが詰まっていますよ」など、作品を紹介する姿が合った。

学生N：子どもが頑張っていたところを保護者の方に伝え、作品の素晴らしさを共有しようとしていた。保護者同士が「〇〇くんの見たよ、上手だったね」と言葉を掛け合う姿が合った。それは作品のそばには紹介カードがあり、誰の作品かすぐに分かるような工夫があったからだと思う。

学生E：すいかは丸の形だったり、半月の形のものもあった。ひまわりは手を使って描いていた。5歳児は絵の具とクレヨンを使って描いていた。

学生P：3歳児は紙粘土を丸められる。自分ですいが描ける。4歳児ははさみを使って型が切れる。毛糸やビーズも使っている。5歳児は三つ編みができる。写し絵ができる。絵本を見ながら絵が描ける。

(一部省略/下線は筆者)

学生たちは子どもたちの作品を見ながら、子どもの思いや活動の様子をいろいろと想像できるようになってきている。学生Aや学生Kのように子どもたちが使った素材などに注目し、年齢によって個性の出し方が違っていること、自分の思いを表現するとはどういうことなのかを考えようとする学生もあり、子ども理解が深まってきていると思われる。しかし多くの学生は、学生Eや学生Pのように表面的にどうなっているか、出来るか出来ないか、あるいは上手いかどうか気になるようで、これまでの小学校から高等学校までの教育の評価と同じように幼児教育を捉えようとする傾向にあった。幼稚園における子どもの評価は、「幼児がどのような姿を見せていたか、どのように変容しているか、そのような姿が生み出されてきた状況はどのようなものであったか」といった点から幼児の理解を進め、幼児一人一人のよさや可能性、特徴的な姿や伸びつつあるものなどを把握する」<sup>9)</sup> ことである。したがって、学生

の出来るか出来ないか、上手いかそうでないかといった評価は幼児教育ではそぐわないので、評価の仕方、子どもの作品の見方については丁寧な指導が必要だと感じた。

また、この体験で保護者対応について考えた学生もいた。それぞれの保護者に丁寧に対応しているということに気づいただけではなく、作品展示の配慮から保護者同士が関わりを持てるようなさりげない支援などについても考えた学生がおり、体験から学ぶ重要性について考えさせられる結果となった。

#### 4. まとめ

以上のように本学附属幼稚園での授業を展開することにより、学生は多くの学びを得たようだ。教育実習前の学生は、「正しい保育」とは「教師の思いに子どもを応えさせる」ことだと考え、教師の指示に従わない子どもたちをいかに指示通りに動かすかが教師の役割だと捉えていた。しかし、幼稚園での授業を重ねる中で子どもに寄り添うこと、子どもの思いを理解することに気づくようになってきた。『幼稚園教育要領』において、「幼児が次の活動への期待や意欲をもつことができるよう、幼児の実態を踏まえながら、教師や他の幼児と共に遊びや生活の中で見通しをもったり、振り返ったりするよう工夫すること」<sup>10)</sup> とあるように、生活の中で見通しをもったり振り返ったりする機会を捉え、子どもの実態に即した体験が積み重ねられるような工夫が必要である。そのような活動のためには子どもの気持ちを受け止め、子どもの視点から活動を考えることが重要であるということを、学生たちは幼稚園での授業から学ぶことができたと考えられる。

教育実習前に附属幼稚園にて保育の体験を行うことで、学生が自分の指導力について考える機会にもなった。担任教師と連携し、学生の指導を行うことで、模擬保育とは違う環境の中で学ぶことができたと思う。予想もしなかったことがいろいろと起こり、学生は自分たちの想像と実際の子どものズレを痛感することとなった。このことは学生にとって子どもを理解し直すきっかけとなったことだろう。橋本は、実習で「保育実践力」を身に付けることが重要だとし、①指導計画を作成する力、②保育を展開

する力の学びについて考察し、指導計画については子どもの姿を詳細に予想しながら展開を考え、事前に模擬保育やシミュレーションを行い、一通りの流れをつかんでおくことが重要だという<sup>11)</sup>。今回の附属幼稚園での授業展開では、学生の想像をはるかに超えた子どもの姿を見ることができたので、指導計画段階における予測の幅を広げることができたであろう。

また行事や預かり保育など、幼稚園教育実習内で全員が経験できないような内容についても全員が経験でき、理解を深めることができたと思われる。このことは保育者として働き始めた時に役立つだろう。

さらに、授業者としての立場からは、講義だけでは見えてこない学生の特徴について知ることができた。机上ではわからない学生の考え方、子どもとのかかわり方の特徴、学生が現場でつまづきやすいことなどを理解することができ、今後の指導に繋がっていくと感じた。

これらのことから、附属幼稚園と連携し「教育実習Ⅰ」の授業を行うことにより、以下のことが見えてきた。

- ①子どものあるがままの姿を感じ、子どもを理解しようとする態度を身につけていくことができる。
- ②指導案の指導において、実際の子どもの姿の予測を広げることができる。
- ③行事や預かり保育など、教育実習期間中に体験できない幼稚園機能についても理解することができる。
- ④授業者として、学生の考え方や子どもへのかかわり方などを把握することができ、指導に繋がる。

授業を通して学生は、保育者として必要だと思う能力として、コミュニケーション能力、子どもの気持ちに寄り添えること、語彙力や作文力、健康管理、基本的生活習慣が身につけていること、子どもの発達理解、感性の豊かさ、保育技術などを挙げるようになっていった。しかし学生Eのように非常に真面目な学生ではあるが、理解のゆっくりな学生をどのように育てていくかが課題である。そのため、

附属幼稚園での授業展開から見えてきたことを授業の中で意識し、附属幼稚園での指導と学内での指導の在り方についてさらに検討していきたい。

## 謝 辞

実践に協力いただきました幼稚園の先生方と園児の皆様にご心から感謝いたします。

## 註

- 1) 松本宗久・永易直子 (2017)「保育・幼稚園教育実習事前事後指導に関する定性的研究」『大和大学研究紀要』3, pp.33-37
- 2) 三澤恵 (2016a)「保育者養成校と保育現場の保育連携活動における現状と課題—学生の実習とボランティアに関する調査」『梅光学院大学論集』49, pp.62-71
- 3) 栗原ひとみ (2014)「幼稚園教育実習Ⅰにおける観察実習の意義—実習前後アンケートから探る—」『植草学園大学研究紀要』6, pp.69-78
- 4) 同上
- 5) 久保田貴子 (2016)「エピソード記録を通して学ぶ—保育科一年生の「観察実習」と「教育実習指導」の授業の中で—」別府大学短期大学部『初等教育—研究と実践—』42, pp.22-33
- 6) 野上俊一 (2013)「保育者志望学生は幼稚園や保育所での体験実習で何に気づくのか」『日本教育心理学会総会発表論文集』55, p.227
- 7) 三澤恵 (2016b)「幼稚園での観察学習と日誌指導の授業実践と効果—学生の主体的な学習を重視した教育実習指導の検討—」梅光学院大学『子ども未来学研究』11, pp.31-41
- 8) 同上
- 9) 文部科学省 (2018)『幼稚園教育要領解説』フレール館, p.122
- 10) 文部科学省 (2017)『幼稚園教育要領』フレール館, p.11
- 11) 橋本希義 (2015)「幼稚園教育実習生の保育実態からとらえた保育実践力—幼稚園教育実習の現状と課題—」会津大学短期大学部『幼児教育研究』1, pp.31-36